

政治学上の観点よりする山田方谷陽明学の学風

——とくに革命の学への転移——

近 藤 真 男

目 次

- 一 はじめに
- 二 日本陽明学の源流
- 三 理気の説の西洋哲学版
- 四 方 谷 学
- 五 革命の学への転移

一 はじめに

日本近代の政治思想・倫理思想上陽明学の意識影響は逸すべからずであるが、備中の小藩高梁の山田方谷塾趾並びに館趾を昭和五三年三月に訪い高梁松山藩の吉備三川の一清冽高梁川に臨み臥牛山の山容標高六二〇米の山巔に紛壁鮮明水谷（ミズノヤ）並びに板倉氏の五万石の象徴を仰ぎ師の尊貌沿革の偶然ならざるを感ずるのである。

近代一九世紀の陽明学の巨峰の徒と云へば、佐藤一斎、佐久間象山、山田方谷に止めを刺す。明治以降は陽明学者ならずともその研究者として安井小太郎、井上哲次郎、安岡正篤がいるが、本研究として（近藤）宇野哲人、安岡正

篤監の明德出版社刊『陽明学大系第九卷「日本の陽明学（中）」』富山房版、井上哲次郎著『日本陽明学派の哲学』に負う。外にストア哲学文献ドイツ理想主義 *Der Deutsche Idealismus Literatur* に由った。

尚、陽明学の道統 *Schule* は近世江戸期では、中江藤樹↓熊沢蕃山↓淵岡山↓三輪執斎と流れ、中間不振の所、佐藤一斎中興し、吉村秋陽、東沢瀉、山田方谷、池田草庵と続き、別到大橋訥庵、安積良斎、斎藤拙堂と流れ、佐久間象山↓吉田松陰と及んだ。特異なるものとしては大塩中斎あり、「革命」の実践哲学者としては吉田松陰で噴騰した。抑々陽明学は「革命の学」としての要素潜むべく実践窮行に出づるのであるが、藤樹蕃山以来、方谷までは純理論派の範疇に入るべく方谷その人も経世家としての実を挙げた人である。別に方谷門人として河井継之助も添えることが出来る。安岡正篤曰く「日本に於いて『伝習録』の研究と云えば、先づ指を三輪執斎と佐藤一斎に折る。佐藤一斎の門より出でたる山田方谷はその学風経験とも偉大なる人物で、若しもこの人が幕末の大藩に出たならば、明治維新に如何なる貢献を得たか測り知れぬものがあつたろうと思われる」と。洵にひとはその恰好の舞台、天の時を与えねば池中のものである。私が方谷に寄せるこの役不足の *Bühne* に痛恨するのである。

注

- ① 昭和四十七年七月、明德出版社『刊陽明学大系第九卷「日本の陽明学（中）」』一頁。

二 日本陽明学の源流

彼らの基本的なテキストと云えば『伝習録』であるが、『伝習録』は王陽明の語録で弟子及び時人に答えた書簡の

集録も加わる。陽明学の本質を知る書であるが、上中下の三巻から成っている。書名は『論語』の云う「伝不習乎」に出来する。王陽明の学は朱子学の Antithese から生れている。それで朱子学の分析から始めなくてはならない。且つは本テーマの方谷の学は、陽明に基くは固よりその本源は『孟子』『養気章』に出づると為す。然れば『孟子』の公孫丑章句上に発せなくてはならない。

抑、明道伊川の学は形而上学として在来の儒学を哲学化した。これが大成は伊川歿后、朱子学出づるに及び宋学を以て汎称せられる。以上綜合して又の名を程朱の学と云うがこれらは老仏二氏の影響を受けたものである。孔孟学は努力主義、実践の学問である。老莊となると著しく形而化化する。これが Antithese として王陽明の学の位置づけがある。彼の学問は陸象山の学問の復興に意味があり、『伝習録』に再々謳われている。それは「理氣之条理、氣者理之運用」^①の表現に尽くされているであらう。

注

①（来書問、前日精一之論、即作聖之功否） 精一之精以理言。精神之精以氣言。理者氣之条理、氣者理之運用、無条理則不能……。〔伝習録卷中〕

理・氣の二元論か氣の一元論か哲学上の Metaphysik から議論するを得るが朱子二元論に対して、王子の場合は一元論的傾向が強い。具体的表現としては『孟子』から来るが

① 日、敢問、夫子之不動心、與告子之不動心、可得聞乎、告子曰、不得於言、勿求於心。不得於心、勿求於氣。不得於心、勿求於氣、可。不得於言、勿求於心、不可。夫志、氣之帥也。氣、體之充也。夫志至焉氣次焉。（園点〓近藤）

注

① 昭和四十二年十一月、明治書院版、内野等編『新釈漢大文系(4)孟子』九三頁。

然れば『孟子』では「氣」が基幹である。これを日本陽明学派は敷衍させたのであろう。そこで、孟子の言は次に「浩然之氣」に移るのであるが、

敢問、夫子惡乎長。日、我知言。我善養浩然之氣。敢問、何謂浩然之氣。日、難言也。其為氣也、至大至剛、以直養而無害、則于塞天地立間。其為氣也、取義與道。無之餒也（園点〓近藤）

注

① 昭和四二年一月、明治書院刊、内野等編『新釈漢文大系(4)孟子』九五頁。

本論稿の山田方谷に於いても、それは陽明学、源流は孟子『養氣の章』である。

注

① 昭和四七年七月、明德出版社刊、『陽明学大系第九卷「日本の陽明学(中)」』二五九頁。

以上の所論は倫理学、哲学の範疇であるが実践面として「政治学」的性格を帯びる。それは「意志」を強調するからである。Sein の側面を捉えるなれば倫理学であり、Sollen の側面を捉えるなれば「政治学」である。理氣の形而上学凝って Metaphysik から出発し治国平天下の秩序に任ずるからである。反面それは「謀叛」の学としても目せられ朱子学が官府の御用学派たるに比し陽明学は幕府の隠然一敵国の覬を呈し、国家権力より独立を促す。これ政治の「動態学」でないか。敢えて云うなら朱子学は固陋化したに反し陽明学は活力の学である。

注

① 昭和一一年九月、富山房刊・井上哲次郎著『日本陽明学派之哲学』二頁。

② 同、四頁。

その意味で山田方谷は恰好の陽明学者である。彼は板倉勝静（松叟公）に登庸せられ、政治に執奏、賄賂を戒しめ

賭博を禁じ王守仁に倣い匪賊を敵対し、貧民を救助し貯倉を設け道路を修め藩の財政を建て直した。藩札の兌換等經濟の厚生に効があった。とくに嘉永二年以後は板倉候の幕府登庸に仍り彼は中央政府に建議参画し陽明の学を地で行った。蛟竜の池中のものでないのと一般である。蓋しここにこそ彼の奉ずる陽明学の真骨頂が在ったのである。

注

① 昭和四七年七月、明德出版社刊、『陽明学大系第九卷「日本の陽明学(中)」』五二～五三頁。

② 同、五四頁～五五頁。

何をか方谷陽明学に源流敷衍と観ずる。文久二年^①後慶喜の政治に参画し西周等と交遊し天下の方谷として押しも押されぬ存在となったことこれである。

注

① 昭和四七年七月、明德出版社刊、『陽明学大系第九卷「日本の陽明学(中)」』五五頁～五六頁。

三 理氣の説の西洋哲学版

理氣の現象のとくに「氣」一元論の西洋哲学の最も適きはヘーゲル哲学であろう。ヘーゲルの *Phänomenologie des Geistes* では「精神」の遍満を説き *Bewußtsein* ^① から発して理性 *Vernunft* は *Geist* 昇華し、*Religion* に終局している。これは「氣の鋭」が「塞于天地之間」の過程である。それをヘーゲルは *Kunstwerk* と為した。^②

注

① *Friedrich Hegel, Phänomenologie des Geistes, Friedrich Frommann Verlag, 1964, S. 81.*

政治学上の観点よりする山田方谷陽明学の学風(近藤)

② *ibid.*, S. 538.

「養気の章」に氣一元論を説いた孟子は政治学の徒であるが、ヘーゲルも法哲学を通じて政治に——わけて当時の②
Preußen に最も興を示した。従って彼の国家学は Preußen に於いて完成されたとし「氣」の充実を説き Moralität
を「氣」と置き換えている。彼に於いては「氣」→「道徳」→「国家」→“Preußentum”であった訳である。

注

① Friedrich Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, Friedrich Frommann Verlag, 1964, S. 310.

② *ibid.*, S. 161.

彼の「精神」Geist はゆくりなくも王子の「氣」に通ずる。即ち曰く「精神」は、①主観（個人）的、②客観（社
会）的、③絶対（神）的に三段階に発展する。主観的精神の課題は自然からの解脱で、此の拘束から逃れることであ
る。——これも王子の「禪」に作用した「身心脱落」である。その自由を彼は Sich-Sein の本質的なものととる。そ
れは本能より脱して「一般意志」に昇華することであり、その Allgemeine 化が客観的精神である。王子と「禪」と
は別に論ぜねばならないが、ヘーゲルが「精神」の発展で Befreiung を論じているのは興味あることである。

注

① Friedrich Hegel, *Phänomenologie Geistes*, Friedrich Frommann Verlag, 1964, S. 158.

さうしてこの客観的精神だが、それは Recht, Moralität, Sittlichkeit に展開し、この Sittlichkeit が Familie,
Gemeinschaft から Gesellschaft 化し、Staat で最高段階に達するとする。また絶対的精神は芸術・宗教・哲学に開
展し「自由」の段階となる。この絶対的精神が彼の場合 aufheben にされた形で王子の云う「融通無碍」である。こ
れは Verrunft の項の頂点である。

注

① Friedrich Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Friedrich Frommann Verlag, 1964, S. 553.

四方谷学

『孟子養氣章或問図解』^①は方谷唯一の著で、陽明学が『孟子』養氣の章に出づることを示しこれの図解である。こうした著述の先例は熊沢蕃山の『心法図解』がある。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、『陽明学大系第九卷「日本の陽明学(中)」』二五七頁。

この図解の導入を見るに原漢文であるが、語ニ曰ク「人ヨク道ヲ弘ム、道、人ヲ弘ムルニアラズ」ト。蓋シ天地ニ大氣アリ。人コノ氣ヲ得ル、コレヲ性ト謂フ。コノ性ニ率ヒコレヲ道ト謂フ。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、『陽明学大系第九卷「日本の陽明学(中)」』二五七頁。

これは水戸学で「弘道館述義」の思想でもある。水戸学は抑々王子の学であるが、これが国体思想に敷衍したものである。東湖の述に、

弘道者何。人能弘道也。道者何。天地之大径。而生死不可須臾離者也。

方谷は語り継ぐ。

① 人克クコノ性ヲ知ッテ、コノ道ヲ見、実悟実得シテ、コノ心ニ透徹シ、コノ身ニ体履シテ、ノチニ道始メラ弘ム
政治学上の観点よりする山田方谷陽明学の学風(近藤)

ベシ。然レトモ古今儒生、佳々、道ヲ外ニ求メ、見開ニ馳聘シ、書冊ニ陥溺シ、タゞ言説知能、以テ道得ベシトナス。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、『陽明学大系第九卷「日本の陽明学（中）」』二五七頁。

陽明学の本質に迫るもので「以天地為経文」と道破した二宮尊徳の学風に髣髴するものがある。

① 何ゾソノ惑ヘルノ甚ダシキヤ。道、心ニ存ス、豈書冊ニ在ランヤ。学モマタ心悟ニ存ス、豈見聞ニ在ランヤ。学者宣シクコレヲ心ニ求ムベシ。奚ゾコレヲ言説知解ニ求ムベケンヤ。

書物は糟粕である。これは初学者を戒めるコベニクスの転廻である。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、『陽明学大系第九卷「日本の陽明学（中）」』二五七頁。

① 古人曰ク「六経ハ心ノ注解ナリ」ト。シカラバスナハチ人ノ道ニ求ムルハ、タゞ克ク身心ニ体認実践シテ、ノチニコレヲ経ニ証シテ可ナリ、且ツソノ古ノ聖賢人ヲ教フル、必ズ簡明ノ言ヲ立テ、以テヲ道ヲ指示シ、至約ノ名ヲ掲ケテ、以テコノ道ヲ総括シ学者ヲシテコノ道ニヨリ易カラシム。蓋シソノ旨深シ。舜、禹アヒ授受スルニ、精一ノ訓ヲ以テセシヨリ、ソノ本体ヲ言ヘバ、スナハチ孔子ノ仁、曾子ノ忠恕、子思ノ誠、孟子ノ仁義コレナリ。仁、忠恕、誠、仁義は儒道徳の眼目であるが、要するに対象の群盲象と撫するに似たりで角度の相違であらう。その太宗は仁と仁義で孔子、孟子の独壇上である。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、『陽明学大系第九卷「日本の陽明学（中）」』二五八頁。

孔子の「仁」を敷衍したのが孟子の「仁義」であるが、前者の「仁」を「論語」に執り、後者の「仁義」を『孟子』七編に執った彼の研究に、後者は「惻隱」^①に発する「四端」に分がある。蓋し人の心理的本能を云う。

注

① 昭和一六年一月、岩波書店刊、山口察常著『仁の研究』一一五頁。

孟子の云う「惻隱之心、羞惡之心、恭敬之心、是非之心は蓋し儒教の立脚点でノルム Norm 以前のものである。ノルムはそれの秩序づりに過ぎないのであって「非由外鑠我也」^①の意で經学とは輪廓に過ぎない。

注

① 惻隱之心、人皆有之。羞惡之心、人皆有之、恭敬之心、人皆有之、是非之心、人皆有之、惻隱之心、仁也。羞惡之心、義也、恭物之心、礼也、是非之心、智也、仁義礼智、非外鑠我。（孟子告句上）

① ソノ工夫ヲ言ヘバ、スナワチアルイハ執中ト曰ヒ、アルイハ求仁ト曰ヒ、アルイハ尊徳ト曰ヒ、アルイハ集義養氣ト曰フ。ソノ言異ニシテ、ソノ道ハ同ジ。ソノ道同ジキニ、何ヲ以テソノ言異ナルゾ。コレ聖賢オノオノミゾカラ悟リ、ミズカラ得ルトコロニヨリテツコレヲ表意發揮スルノミ。コムヲ以ラ後ノ学者、マタ必ズ一家ノ宗旨アリ。一、二字ヲ選ビ、ソノ要領ヲ掲ゲテ、以テ学ノ標準ヲ示セリ。濂溪周子ノ主静ニ於ケル、晦翁朱子ノ窮理ニ於ケル、象山陸子ノマヅソノ大ナルモノヲ立テルニ於ケル、陽明王子ノ致良知ニ於ケル、コレ皆コノ道ニ於イテ、独悟自得スルトコロニシテ、古人ノ糟粕ヲ嘗ムルニアラザルナリ。故ニ学者苟モソノ人一家ノ宗旨ヲ知ラズバ、マタ以テソノ人畢生苦心シテ、コノ道ニ發明スルトコロヲ知ルニ足ラザルナリ。

注 以上はイントロダクションの文であるが、学問の本質を語り到底文字の鉛槧の徒でないことを暗示している。

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学（中）」』二五八頁。

門人岡本巍は云う。

① 巍カッテ贅ヲ方谷山田先生ノ門ニ執ル。巍ノ謫陋非才、奚ゾソノ実ニ入ルヲ得ンヤ。シカレドモ徒遊ノ久シキ、夙夜親炙シソノ鞭策薰陶ヲ受ケザ幸ヒニ聖門ノ藩籬ヲ窺フヲ得タリ。先生ノ学モ、マタ宗旨アリ。何ヲカ宗旨ト謂フ。一氣ノ自然ニ従フ、コレナリ。

養氣の学は自然主義である。この説は老荘とも一致する。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」』二五八頁。

蓋し先生晩年大イニコノ道ニ独悟自得スルトコロアリ。常ニ及門ノ諸士ニ示シテ曰ク、「宇宙間ハ一大氣ノミ。タゞコノ氣アリ、故ニコノ理ヲ生ズ。氣、理ヲ生ズルナリ、理、氣ヲ制スルニアラザルナリ。故ニ人克ク一氣ノ自然ニ従ヘバ、スナワチ仁トナリ、義トナリ、礼トナリ、智トナリ、万変ノ条理随ツテ生ズ。コレハコレ聖門ノ真血脉ナリ。豈氣ノ上別ニ理ヲ加フベケンヤ。シカレドモ洙泗ノ学絶エテ、濂溪ノ学興リシヨリ、ソノ学ハ理ヲ以テ士トナシ、理ハ氣ヲ制シテ、理ト氣トオノヅカラ判ル。而シテソノ所謂理ハ、人ノ思考構成ニ出デテ、氣中自然ノ条理ニアラザルナリ。明ノ余姚、王子出ヅルニ及ビ、ソノ学独リ氣ヲ以テ主トナス。コ、ニ於イテ聖門ノ道、始メテ粲然トシテ世ニ明ナリ」ト。コレ先生教伝ノ大略ナリ。故ニ先生晩年最モ王子ノ学ク崇信ス。マタカツラ巍等従遊ノ士ニ謂ヒラ曰ク、「王子ノ学ハ、良知ヨリ悟入ストイヘドモ、蓋シソノ本源ハ孟子ノ養氣ニ出づルノミ」、ト。

良知の学は蓋し判断批評を加える知的分子で先驗性に加えるカントの命題に髣髴するものであるが、陽明はその先

行するものに注ぐものか。であるから筆者は原始形而上学なりと判ずる。

注

① 昭和二年二月、甲子社刊、見尾勝馬著『王陽明の哲学』一一四頁。

② Immanuel Kant, Gedanken von der wahren Schätzung der lebendigen Kräfte, Druck und Verlag von Georg Reimer, 1910, S. 32.

① コムヲ以テ巍カツテ同門ノ友ト、先生ニ請フニ、養氣本ノ講説ヲ以テス。先生莞爾トシ領容シ、直チニ講筵ヲ開催、詳講精説シ、以テソノ蘊奥ヲ尽ス。シカレドモナホソノ惑ヒアランコトヲ恐レ、更ニ或問図解ヲ作りテ、以テソノ旨ヲ明ラカニス。コノ篇スナワチコレナリ。コ、ニ於イテ、巍等同門ノ友、最モ警発サル、トコロアリ。コレヲ以テ『孟子』七篇ヲ読マバ、融然通ゼザルトコロナシ。独リ『孟子』ノ書ノミナラズ、コレヲ六經ニ証スルニ、一一符節ヲ合ハスガ如シ。シカラバ先生ノ学得スルトコロハ、スナハチ王子良知ノ学ニ在リトイヘドモ、シカモ悟ルトコロハスナハチ孟子養氣ノ道ニ在リ。シカリ而シテ孟子ノ所謂氣ハ、スナハチ子思ノ所謂誠ナルモノナリ。子思ノ誠ハスナハチ曾子ノ忠恕ナリ。曾子ノ忠恕ハスナハチ孔子ノ仁ナリ。孔子ノ仁ハ、スナハチ舜、禹ノ中ナリ。舜、禹ノ中ハスナハチ天地ノ一大氣ナリ。コノ所ニ先生ノ所謂一氣自然ニ從フモノハ、マタ中ヲ執ルナリ。仁ヲ求ムルナリ。忠恕ヲ致スナリ。誠ヲ存シ、氣ヲ養フナリ。コレニヨッテコレヲ觀レバ先生ノ一氣自然ノ旨、天地ヲ貫キ、古今ニ亘リ、猶水火ノ熱シ、水ノ冷ヤカナルガ如ク、断断乎トシテ百世聖人ヲ俟ツテ、惑ハザルモノナリ。豈ニ一家ノ私学ナランヤ。王子曰ク「道ハ天下ノ公道ナリ。学ハ天下ノ公学ナリ。コレヲ公言セシノミ」ト。シカラスナハチ先生豈ニ特ニ門戸ヲ張り、流派ヲ別チ、異ヲ立テ奇ヲ好ミ、以テ天ノ公道ヲ私スルコトアランヤ。孟子養氣の道が王陽明の天下の公道であり、我が水戸学の弘道論に及ぶものである。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」』二五九頁。

② 且ツソレ先生ノ人ヲ導ク、誨ヘテ倦マズ、勞シテ厭ハズ、ソノ業ヲ授ケ道ヲ伝フル、循循トシテ誘掖シ、娓娓トシテ講説ストイヘドモ、シカモソノ玄妙精微ニ至リテハ、スナハチ敢ヘテ尽サズ。タマタマ門弟子ソノ義ヲ質スアレバ、タダソノ端ヲ開キ、ソノ惑ヒヲ解クノミ。ココヲ以テミヅカラコノ道ヲ悟得スルトコロアリトイヘドモ、未ダカッテスナハチコレラ人ニ語り、コレヲ書ニ著ハサズ。コレコトサラニコレヲ秘スルニアラザルナリ。所謂道ハ心悟ニ在シテ、言語書冊ノヨク尽スルトコロニアラズ、見聞知能ノヨク得ルトコロニアラズ。故ニ人ラシテミヅカラ思フテコレヲ得セシムルノミ。本リ先生シカリトナスノミニアラズ。聖門、人ヲ教フルノ法ハ、モトコレノ如シ。シカリ而シテ先生ノ著書、僅カニコノ一篇アルノミ。惟レ猶王子ノ『大学問』ニ於ケル、孟子ノ七篇ニ於ケルガ如シ。先生晩年、畢世意ノ発スルトコロヲ以テコノ道ヲ明ラカニシ、後学ニ恵ムノ意アッテ存スルカ。シカラバスナハチコノ節独リ後学ニコレ賜ヲ恵ムノミナラズ、克クコノ道ヲ弘メテ、聖門ニ功アルモノト謂フベシ。コノゴロ学友ト謀リ、コレヲ先生ノ後ニ請ウテ、以テ割臚ニ附ス。巍固ヨリ不敏トイヘドモ、幸ニ聊カ先生ノ宗旨ヲ聞クコトヲ得。故ニココニソノ固陋ヲ志シ、ホボソノ聞クトコロヲ叙シ、以テコレヲ同志ニ頒ツ。同志ノ士コノ篇ヲ読ム者、先生ノ学ヲ知リテ、聖人ノ道ヲ求ムル於テ、未ダ必ズシモ少補ナクンバアラザルニ庶カラシカ。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」』二六〇頁。

全編『孟子の四端の思想につき良い意味の本能主義である。「仁」と曰い忠恕と云い孔孟の思想の Originalität に触

れる。然らば即ち方谷学の本質は『孟子』を出ないと云う評もあろう。要は孔孟の学の選択の問題で、その倫理思想の *Sollen* を強調する形而上学が朱子のそれであり、*sein* を力説敷衍するのが方谷学に及ぶものである。

因に水戸学では釈氏を排するが方谷学では「禪」に關連がある。それは直心投入で儒学の「本能」の理念に走るのから通ずるものがあるのであろう。方谷は遊學時蘭溪禪師との遊交があるが、その「観念論」理想主義である点に共鳴したものであろう。

陌上占居日倚欄　結跏不必事深山

日々瞳空了大千界　何妨形骸住世間

はその述懐であるが方谷の禪機に通ずるを見る。

注

① 昭和五二年一〇月、明德出版社刊、山田・石川著『山田方谷、三島中洲』五三頁、二七七頁。

抑々王子の思想が朱子学否定から道・仏・墨の混入が見られ超越主義に傾きその点老莊をも汲み *synchronisig* しているが方谷学もこのひそみに倣うものであろう。

注

① 昭和四一年三月、明治書院刊、『新釈漢文大系(13)伝習録』一四頁。

更に門人岡本巍は敷衍している。方谷曰く

明治癸酉ノ冬、閑谷黌舎ニ寓シ、諸子ノ需メテ応ジテ、孟子養氣ノ章ヲ講ズ。専ラ余姚王子ノ旨ヲ奉ジテ、朱註ニ遵ヘズ。聴ク者疑ヒ多アラシムトヲ恐レ、コレガ図解ヲ作リテ、以テソノ旨ヲ明ラカニス。シカレドモソノ源ヲ政治学上の観点よりする山田方谷陽明学の学風（近藤）

究メテ、ソノ流レヲ詳ラカニスルニアラザルヨリハ、以テ疑ヒヲ釈クニ足ラズ。因フテ更ニ惑問数条ヲ作りテ、ソノ端ニ置ク。図ヲ観ル者、マヅコレヲ読マバ、スナハチソレ惑ハザルニ庶カラン。

閑谷疊舎シツタニコウシヤは備前藩主池田光政が寛文一〇年（1660）開いた藩校であるがその遺構比較的良好に保存され、今に結構を存している。筆者（近藤）は先年訪うたが梅花馥郁清流に臨み和氣郡の閑静の地である。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」』二六一頁。

或ルヒト問フ、「先儒謂フ『孟子ノ氣ヲ養フハ、前聖ノ末ダ発セザルトコロ』ト。果シテソノ言ノゴトクナランカ。養氣ノ道ハ、古ノ未ダ知ラザルトコロシテ、二帝王モ、マタ未ダコムヲ以テ教トナスニアラザルカ」ト。曰ク、「噫嘻、胡為レゾシカラン。天氣物ハ一氣ノミ、而シテ氣ハ活物ナリ。万物ハ心アリ、オノズカラヨク知覺ス。身アリ、オノズカラヨク運動ス。知覺ト運動ト、頃刻モ息マズ、ソノ氣ヲ養フユエンナリ。一日ダモ養ハズバ何ヲ以テヨク生活セン。タダ人シカリトナスノミニアラズ、飛走動植モ、皆シカラザルハ莫シ。故ニ養氣ノ道ハ、天地ト俱ニ生ジ、万物同ジク有セリ。豈ニ孟子ヲ待チテ後ニ発センヤ。孟子ノ発スルトコロ、将ニソノ名ヲ翹メ、以テ養フ道ヲ害スルモノヲ戒ムルノミ」ト。曰ク、「何ヲカ道ト謂フヤ」ト。曰ク「直養コレノミ。万物ノ化生スル、一大氣ヲ同ジクス。シカレドモ人物形ヲ流ク、オノオノ同ジカラザルアリ。知覺運動モ、マタ從ッテ異ナル。コムニ於イテカ、自然ニ条理アリ。ソノ自然ニ從ヒテ、条理ヲ害スルナクバ、スナハチ大氣ト合一ス。コレヲ直養ト謂フ。自然ニ從ハズシテ、条理背戾セバ、コレヲ不直ト謂フ。物ノ氣ヲ得ルヤ偏ナリ。故ニ知覺運動ソノ形ニ局セラル。タゞ自然ニ從ハバ、ソノ直タルヲ害セズ。人ノ氣ヲ得ルヤ全シ。故ニ智万物ニ周ク、行、ナサルナシ。

コ、ヲ以テ多岐横出シコトゴトクハ自然ニ從フ能ハズ、直アリ、不直アリ、直ト不直トハ、善惡吉凶ノヨツテ分ルトコロ、治乱存亡ノヨツテ起コルトコロナリ。コレソノ養フノ道ヲ害スルモノナリ。戒メザルベカラズ。而シテ孟子ニ至リテ、ソノ名ヲ擧メザルヲ得ザルユエンナリ。

以上は「養氣」の敷衍である。磅礴以て穹窿に迫るものである。

注

① 昭和四七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第八卷「日本の陽明学」』二六二頁。

或ルヒト問フ、「物アレバ必ズ名アリ。養氣ノ道、万古同ジクアラバ、スナハチ孟子以前、何ヲ以テコレニ名ツケタル」ト。曰ク、「神ニ事フレ、コレノミ、神ハ造化ノ氣ナリ。氣ハ人身ノ神ナリ。ソノ物タルハ一ナリ。二帝・三王ハ、鬼神ニ敬スルヲ以テ、人道ノ要トナス。詩・書ニ戴スルトコロ、歴歴トシテ觀ルベシ。而シテ神ニ事フルノ道ハ正直ヲ以テ要トナス。ソノ道タルハ一ナリ。上古ノ世風氣淳樸、私智未ダ生ゼズ。ソノ君子ハスナハチ聰明正直、鬼神トソノ徳ヲ合ハス、ソノ小人ハスナハチ淳樸正直、タゞ神ニ聴ク。

注

① 昭和四七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」』二六三頁。

この辺は我が古神道と詩經の精神と合一で上代僕直の精神はsimplicityの論理で文飾以前の相である。李白の散分詩である

① 夫天地者万物之逆旅、光陰者百代之過客、而浮生如夢。為歡幾何。古人乘燭夜遊、良有以也。況陽春召我以煙景、大塊假我以文章。……

の如き既に「大塊」が「文章」であり巧者の世界である。方谷の理想はそれ以前の相である。

注

① 昭和四二年三月、明治書院刊、星川等編『新釈漢文大系第一六卷「古文真宝（後集）」』一〇一頁。

故ニ神ニ事フルノ名立チテ、養氣ノ道、ソノ中ニ行ハル。ソノ道同ジクアリトイヘドモ、シカモソノ名ノ未ダ著ハレザルユエンナリ。世降リ道微カニ、風氣澆薄、私智曰ニ聞ケ、タゞ人ヲ特ミ鬼神ヲ信ゼズ。ソノ上ナル者ハ、智力モテ世ヲ御シ、以テソノ私ヲ逞シクス。ソノ下ナル者ハ、邪曲己レヲ行ナヒ、以テソノ欲ヲ恣ニス。神ニ事フルノ名廃レテ、自然ノ道、コレニヨルモノ鮮シ。孟子ノ生マルルソノ時ニ当リ、古道ノ復スベカムザルヲ知ル。コムニ於イテ独リ人ノ心身ニ在ル者ニ就イテ、養氣ノ名ヲ擧メ、以テ直養ノ方ヲ示ス。コレ豈ニ己ムヲ得ンヤ。時シカルナリ」ト。

孟子の「直養ノ道」が根幹であることを示しているが、これは努力主義と老莊の無為主義の切点に触れないか。

或ルヒト問フ、「孔子ノ時、古ヲ去ルコト已ニ遠シ。大聖ノオヲ以テ、時ト變通ス。ソノ恒ニ言フトコロモ、マタ人ヲ語リテ神ヲ語ラズ、シカレドモ養氣ノ道ハ、一言モコレニ及ブコトナキハ何ゾヤ」ト。曰ク「孔門ノ人ヲ教フル、詩・書・礼・樂・民生日用ノ外ニ出デズ。詩・書・礼・樂ハ、氣ヲシテ直ナラシムルノ具ニシテ、民生日用ハ養氣ノ実ナリ。一部ノ『論語』孰レカ養氣ノ道ニアラザランヤ。シカルニ説者アルイハ、『知者ハ惑ハズ、仁者ハ憂ヘズ、勇者ハ懼レズ』ノ言ヲ挙ゲテ以テコレニ当ツ。見ノ浅キ者ト謂フベシ。シカレドモ神氣合一ノ蘊ヲ説クニ至リテハ、スナハチコレヲ易ニ発セリ。易ハ古ノ神道ナリ。故ニソノ易ヲ伝フル、神道ニ因リテ人事ヲ明ラカニス。而シテミナ陰陽ニ氣ノ自然ニ出デズ。ソノ自然ニ從ヒテ、鬼神トソノ吉凶ヲ合ハス。コレスナハチ上ハ神ニ事フル

ノ道ヲ承ケテ、下ハ養氣ノ学ヲ聞ク。聖人ニアラザルヨリハ、ソレ孰レカコレヲヨクセン。

『易』が中国古神道即ち鬼道なるかは疑問であるが革命肯定の哲学であることは否めない。それは自然哲学形而上学であろうが、我が国の根本羽嶽最も研究が深い、根本通明の革命否定論の政治学には別に触れ度い。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、『陽明学大系第九卷「日本の陽明学(中)」』二六三頁。

先儒謂フ「『鬼神ハニ氣ノ良能ナリ』ト。コノ言尤モ孔子易ヲ伝フルノ旨ヲ得、而シテ以テ神ノ氣ト一ニシテニアラザルヲ識ルニ足ルナリ。子思ソノ家学ヲ伝ヘ、一部ノ『中庸』モ、マタ人事ヲ以テ教ヲ立ツ。シカレドモソノ本源陰微ヲ説クハ、スナハチ鬼神ノ徳ヲ挙げ称セリ。孟子ニ至リテハ、竟ニコトゴトク人事ニ帰シテ、上古神ニ事フルノ道、オノヅカラソノ中ニ備ハレリ」ト。

孔孟と『鬼道』とは相究れざるものか否か。縦横家と繋る『思谷子』は関連あるものか。『漢書藝文志』に註があるが古代偽書と交錯するものがある。考証としても方谷学不充分。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」中』二六四頁。

或ルヒト問フ、「孟子己ニ歿シ、漢・唐ヲ歴テ以テ宋ニ至リ、養氣ノ言、独リソノ書ニ存シテ、ソノ教明ラカナラズ、ソノ道豈ニ息ムニ幾カラザルカ」ト。曰ク「漢・唐ノ諸儒ハ、タダ訓話ノ末ヲ事トス。ソノ義明テカナラザルユエンナリ。シカレドモ人物化生シ、生生息マズ、スナハチ養氣ノ道、何ゾカツテ一日ダモ息ムコトアラナヤ。タダニコレヲ養ノコト道ニ違フ。コレソノ治国ニ少ナクシテ、乱日ニ多キユエンナリ。宋ノ時ニ亘リ、濂溪溪学興

リテ、理氣ノ説漸ク詳ラカナリ。ソノ諸君子、専ラ力ヲ実行ニ用フ。コムニ於イテカ、ソノ道マサニ再ビ世ニ明ラカナラントス。シカレドモ理学ノ宗、伊川程子ノゴトキモ、ソノ章ヲ解スルニ、直養ノニ字ヲ分載シ、一章ノ要旨ニ於イテ、未ダ明ラカナラザルトコロアリ。故ニソノ道ヲ学ブ者、實用ノ工夫ニ至リテハ、スナハチ後賢ニ待ツナキヲ得ザルナリ」ト。

方谷学、宋学、訓話学の *aufheben* なるも末だ *Synthese* に至らざるものか。新なる学問の抬頭は先ず文献学の *Kritik* を俟って新精神の *ausprägen* に到るものか。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」中』二六四頁。

以上繰々紹介の点、方谷学の淵藪であるが孔孟、とくに孟子の努力主義の構築と人間心理の機微に出づる分析とである。朱子学はその形上学であって孔孟の実践哲学を *Metaphysik* 化した^①が王子の「意志」哲学化加わって、再び実践化に見て *Willensmetaphysik* と呼べるものであらう。或いはヘーゲル現象学の *der wahre Geist, Die Sittlichkeit* であらう。

注

① Friedrich Hegel, *Plänomenologie des Geistes*, Friedrich Fromann, Verlag, 1964, S. 339.

半島の朱子学者李退溪も方谷学に先行する学徒で兩人は関係はないが退溪の文集からするとそうした学問的摩擦が察せられる。蓋し本邦と同心円上の学問的業績である。

注

① 檀紀四二八年十一月、成均館大学校刊『退溪全書上』三〇〇頁。

五 革命の学への転移

学統の問題を離れて陽明学に内在する実践要素は、この Schule に革命的要因あるを思わしめる。日本では佐久間象山、吉田松陰、大橋訥庵とくに河井蒼竜大塩中斎がそれである。現代に於いては安岡正篤もそのひとりである。方谷の門人河井蒼竜（継之助）については、その師方谷の『理財論』^①（上・下）が彼の「愛読文抄」に含まれているがことは継之助の思想の上には影響多大である。

注

① 昭和四七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」中』三二五頁。

錙銖

理財^①ノ密ナル、今日ヨリ密ナルハナシ。シカルニ邦家ノ窮スル、今日ヨリ窮スルハナシ。献畝ノ税、山海ノ入、関市・舟車・蓄産利、毫糸モ必ズ増ス。吏士ノ俸、走賦ノ供、祭祀・賓客・輿馬宮室ノ費、錙銖、必ズ減ズ。理財ノ密ナルコトカクノ如ク、カツコレヲ行ナフコト数十年、シカモ邦家ノ窮スルコト、マスマス救フベカラズ。

（理財論（上））

（理財論（下））

② 財ノ外ニ立ツト、財ノ内ニ屈スルトハ、已ニソノ説ヲ聞クヲ得タリ。

要するに理財論は「経世済民」の術であって経済即ち政治の要諦を論じたものである。凡そ男子と生れ、政治の衝に在って四民の休戚を問うは本懐であろう。蒼竜窟長岡藩牧野の老職に在って、この自覚あったものである。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」中』三二二頁。

② 同、三二四頁。

河合とこの革命の学との「出会い」は『王文成公全書』を通じてである。曰く

王文成公全集^①へ、我が邦未ダ翻刻ヲ経ズ。舶載シテ至レバ、スナハチ書賈利ヲ罔ス。価四、五金ニ至レドモ、シカモ人争ヒテコレヲ購フ。予モマタカツテ一部ヲ獲、居草熟続ス。……蓋シ公ノ道タル、心神ノ精ニ通ジテ、事為ノ数ニ泥マズ。運用ノ妙ニ達シテ、区画ノ迹ニ滯ラズ。

方谷共河合共と大變な惚れ込みである。蓋し武人の平生の術、居所進退である。

注

① 昭和四十七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」中』三二六頁。

方谷と継之助との相違であるが方谷の理想主義に対し河合生は経世済民主義、実利主義で武人として直情径行の士であるがその辺の教誡が滲み出る。

吉田松陰となると、その Stundpunkt は戦術論であり家学山鹿流から派出し、^① 最后は国体論に至るのでその思想的展開、素朴なる中にも理想主義が燃え実務家たるの反面を語っている。

注

① 昭和三十七年十一月、岩波書店刊、和辻哲郎著『和辻哲郎全集^③』三六八頁。

素行の『武教全書』の「守城」の件だが、曰く

城ニ籠リ降参セント思ハバ籠城スルコト勿レ。前方旗下トナルベシ。籠城イタス上ハ、負ケバ必ズ切腹ト思ヒ定

ムルベキコト。

右に対する松陰の解釈であるが、

① コレ、心定メノ事ヲ委シク云フナリ、一先ヅ籠城シテ、叶ハヌトキハ降参ヲ為スベシト言フ様ナル定マラス心ニテハ、籠城スルトモ、何ゾソノ節ヲ遂グルコトヲ得ンヤ。

と手厳しい。これ『葉隠』の「武士道といえるは、死ぬことゝ見つけたり。二つの場合にて、早く死ぬかたに片付くばかりなり」と同根である。また大導師友山の『武道初心集』③「武士道に、二法四段の子細有之候。……」の素行学伝統の『士法』が謳われている。何れにしても士の常在戦場の分別である。

注

① 昭和四七年七月、明德出版社刊、『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」中』三三三頁。

② 昭和一八年六月、岩波書店、和辻哲郎著『葉隠』(上)二三頁。

③ 昭和一八年五月、宮越太陽堂刊、中柴編『武士道初心集』一五頁。

松陰は励声一番孫子を援いて「陷之死地然後生」と。

コレ孫子九地篇ノ語ヲ引キテ、心定メニ就キテ又一步ヲ進メテ云フナリ定大概、城ニシテ陥リ、軍ニシテ覆ヘルモノハ、心定メナク、将モ士卒モ死ヲ恐レ敗ヲ虞ル、ヨリシテ、却ツテ死ト敗トニ至ルナリ。

注

① 昭和四七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」中』三三五頁。

尚、松陰は『講孟余話』で性善説を論じ方谷の養気の説と符号し陽明学の思想に通うのである。

兵ヲ学ブ者ハ経ヲ治メガルベカラズ。何トナレバ、兵ハ凶器ナリ。逆徳ナリ、用ヒテ以テ仁義ノ術ヲ濟サンニ政治学上の観点よりする山田方谷陽明学の学風(近藤)

ハ、苛モ経ニ通ズル者ニアラズンバ、安ソゾヨクシカランヤ。

右は要するに『孫子』に出で経書に依り匡すの工夫なくては叶わない道理を説く。経、史は士大夫の必読の修であつてまず「経」に伝つて倫理の基を匡すのである。

注

① 昭和四七年七月、明徳出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」中』三三六頁。

「史」は政治学である。他に詩学を治め文学の情操を昂める。この三者が士たるもの、表芸である。それらは渾成して彼の『士規七則』に成る。これは彼の国体観の根幹であるがその国体観は大義明分論より発し陽明学の精神である。松隱を識るには師弟・友人の交情より入るがひとつの方法であるが、佐久間象山は畏敬する師で「佐久間は当今之豪傑都下一人に御座候——慷慨気節、学問あり識見あり……」はこの蘭学者の唯者でないことを示している。

注

① 昭和四七年七月、明徳出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」(中)』三三九頁。

象山、この尊大な人物も革命派のひとりでその『省誓録』は並々ならぬ数奇な運命と陽明学敢為の念を謳っている。曰く、

① 身ハ囹圄ノ在ルト雖モ、心ニ愧作ナケレバ、オノズカラ方寸虚明、平日ニ異ナラザルヲ覚ユ。人心ノ靈ハ天地ト上下同流ス。

は『伝習録』に「夫レ聖人ノ心ハ天地万物ヲ以テト一体ト為ス」に符号し陽明流の表現である。即ち彼は造次顛沛もこの菩薩行であつたのである。

注

① 昭和四七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」(中)』一九八頁。

彼の一著『礮卦』は『易』の思想と得意の砲術論との融合であるが、

① ソレ易ハ廣々ニシテ大ナリ。以テ遠キヲ言ヘバスナハチ禦ガズ。以テ邇キヲ言ヘバスナハチ正ニシテ正シ。以テ天地ノ間の言ヘバスナハチ備ハレリ。故ニ人物ニ達シ、四海ニ横ハリ、古今ニ亘リテ準トセザルコトアルナク、アルイハ違フコレアルナシ。故ニ未ダ卦画アラザルノ前ノアルトコロノモノ、ソノ象固ヨリ易ニ存ス。

易の妙味は万物ノ事象を一一の象で順列、組合せ化することである。八卦を作り八卦をを重ねて六四卦を作る。乾坤より始めて既済、未済に了るが無限のない *Natur philosophie* である。その辺が象山の「振廻し」砲術観に叶ったのであろう。

注

① 昭和四七年七月、明德出版社刊、小林編『陽明学大系第九卷「日本の陽明学」(中)』二四六頁。

『易』の思想の「天行健」に訴えて五大州に遊ぶ気構えの松陰に連坐するの楔機、次の詩は語って余蘊ない。

① 之子有靈骨。久厭簪簪群。奮衣万里道。心中未語人、雖則未語人。忖度或有因。送行出郭門。孤鶴橫秋晏。環海何茫茫。五州自為隣。周流究形勢。一見超百聞。知者貴投機。帰来須及辰。不立非常功。身後誰能賓。

陽明学者の交流掬すべし。革命の学への転移である所以である。

注

① 昭和一一年九月、富山房刊、井上哲次郎著『日本陽明学派之哲学』五一五頁。

曰く門人に勝海舟、吉田松陰、加藤弘之、西村茂樹、開明派の革命の徒である。蓋し「東洋道德、西洋芸術精粗遺政治学上の観点よりする山田方谷陽明学の学風(近藤)」

「サズ」は彼の真面目であろう。如何となれば儒教的教養の風土に開明の舶載の学への傾斜であるがこの辺の処に当時の日本人の限界を見るからである。あの学問好きの松陰ですら洋学には関心を示さず「余暇ナシ」で省みなかったのである。文獻への誘引も乏しかった故である。思うに松陰の洋学思念に象山を介してのもの、如く

①象山高突兀。雲翳可仰難。何日天風起、失望狡狴蟠。

は素直なる彼への憧憬である。

注

① 明治四一年一二月、民友社刊、徳富猪一郎著『吉田松陰』二二七頁。

幕末艱難の際の実践運動家に松陰、景岳あるが大橋訥庵の如きもそのひとりで陽明学から朱子学に帰した人物であるが彼の行蔵陽明学の窮行に見る。『闢邪小言』は洋学排斥の論であるが彼は攘夷運動家でもある。安藤要撃に先立って捕縛せられたが禁獄の後に宇都宮ノ藩邸に御預けのまま死ぬ。彼の思想は『闢邪小言序』に尽くされているが水戸学と逕庭はない。曰く「我大東之州。神聖垂統。万古無革命。」。革命なき日本と彼の régime 崩し運動と矛盾するが、これは Revolution の定義如何で政治学上の Begriffsbegrenzung 云々が故である。

注

① 昭和一三年六月、至文堂刊、平泉澄編『大橋訥庵先生全集上』一頁。

尚、訥庵の大塩批判に手厳しいものがあるが、大塩に同調している。

①……聞此賊、読書以儒術自任。不知所読何書。論語開卷便謂不知而不愠。又謂犯上作乱。是聖風所判。学問第一義也。而此賊既已不得知之其他何以觀之哉。雖然、此篇責有司、為富商之言、痛快凱摯。切中時弊、読者以人不廢

言。内自省則無不赧然乎。

大塩への傾倒見るべきである。（圈気・筆者）

注

① 昭和一四年二月、至文堂刊、平泉澄編『大橋訥菴先生全集中巻中』一一〇頁。

大塩中斎は1792～1837と稍遡るが、叛乱を地で行った学者として注目に値する。通称は平八郎印家業は代々大坂町奉門の与力である。彼の学風も多分に洩れず朱子学より陽明学に転じ家塾は「洗心洞」と称した。天保七年(1836)の大饑饉に時の奉行跡部山城に、窺民救済を訴えたが容れられず跡部の譴責を喰った。平八部は檄を飛ばし翌々年挙兵暴動に赴いたが一日で鎮圧、潜伏一ヶ月の後発見され養子格之助共自殺、天下を簪動させた。暴動は一日厥起と共に鴻池等豪商の急襲となり、金穀を教じてプロレタリア暴動の態であったが、両町奉行玉造定番の増援を得て鎮定小規模の砲戦が交わされた。計画は未前に変心告訴に始まったが挙兵のプランには変更はなかった。

当大正三年発表の森鷗外作『大塩平八郎』がある。鷗外は淡々と叙しているが、領袖の心理的側面を論じている。曰く

①「平八郎は哲学者である。総てその良知の哲学からは、頼もしい社会政策も生れず、恐ろしい社会主義も出なかったのである」と。

鷗外はドイツ流の Sozialpolitik を指定し Kommunismus を念頭に泛べていたようである。鷗外の「附録」とも叙述は Sachlichkeit である。

注

① 昭和四十七年八月、筑波書房刊、森鷗外著『現代日本文学大学森鷗外』一七〇頁。

大塩の主著は『洗心洞劄記』であるが、曰く

余レ職ヲ辞シテ家居シ、静閑ニシテ事無シ。復嘗テ読ミシ所ノ古本大学ヲ取リテ以テ之ヲ講究シ、粗ボ其誠意致知ノ本色ノ一班ヲ窮ヒ得タリ。……著者、伊川程子ハ其ノ中庸自註ヲ火ケリ。朱子ハ其ノ死ノ前三日、猶ホ改本大学ノ誠意章ヲ改メタリ。而シテ陽明先生ハ嘗テ五経臆説ヲ著ハスト雖モ、今世ニ伝ハルモノハ、其ノ十三条ト自叙、僅カニ之ヲ遺文中ニ見ルノミ。其ノ全文ノ如キハ、即チ先生既ニ自ヲ秦火ニ付スルコト久シト謂ヘリ。經ニ註スルコトノ難キ、大賢ニ在リテ猶此ノゴトシ。況ンヤ吾ガ著ノ諸説の折衷シテ以テ之ヲ積ススルヲヤ。

注

① 一九八〇年五月、岩波書店刊、相良等編『佐藤一斎大塩中斎』三六〇。

イントロダクション、自ら枯れた筆致であるが沸々心底に煮え沸る激情を看る。又曰く

① 道ノ原ハ天ヨリ出ヅ。而レドモ洵ニ徳ヲ知ル者ハ鮮ナシ、ト。即チ道徳ハ乃チ聖学ノ極致ナリ。而シテ天ノ太虚ハ又其ノ原本タルコト、居ナガラニシテ知ルベキナリ。

注

① 一九八〇年五月、岩波書店刊、相良等編『日本思想大系46 佐藤一斎大塩中斎』三六三頁。

反体制の行動家即ち「大虚」を思想する老荘の徒である。それは Anarchie を思慕する Utopist である。「大虚」に対して彼の積極面が「良知」^①である。彼の場合「良知」は「易」であり筆者たる余に云わせれば「狂」である。この認識に徹して「革命」が行われるのである。こゝに於いて根本通明の「易学革命否定論」には左祖し難いのであ

る。

注

① 一九八〇年五月、岩波書店刊、相良等編『日本思想大系46 佐藤一斎大塩中斎』七三七頁。

周易の基本原理解であるが、易は変易なりで事物の変化の相である。その変化の情態を六十四卦とし三百八十四爻に分類する。その千變万化を政情の変化の相に充てるのである。周易では国家の興亡人生の転変に擬した。その本体を「大極」とし分岐が陰陽の二元論である。

注

① 昭和三十三年七月、明德出版社刊、公田連太郎著『易经講話一』五頁。

易は「大極」を通じて朱子学に淵源した陽明学にも由来する。曰く
① 有天地。然後万物生焉。盈天地之間者。唯万物。故受之以屯。屯者盈也。屯者物之始生也。

又曰く

② 物不可以終尽。剥窮上反下。故受之以復。

傍ち stability の原理である。これ陽明学で云う「政治意志論」である。

注

① 昭和三十三年七月、明德出版社刊、公田連太郎著『易经講話一』六七頁。

② 同、八七頁。

政治学上の観点よりする山田方谷陽明学の学風（近 藤）

即ち『易経講話』では革命論を以て擬し、^①唯プロレタリア革命でなく為政者の処置を期待しているのである。その「復」の卦は――――であり地雷復の卦としている。

注

① 昭和三年七月、明德出版社刊、公田運太郎著『易経講話一』八七頁。

要するに天命が幸する限りRégimeは保証されるが、天命が革まれば崩壊すると云うのが「易」の本命である。故に筆者は根本通明の御用学派に反対するのである。

注

① 昭和五六年九月、竜溪書舎刊、森脇皓州著『周易釈詁上』四頁。

明治に於いては、安井小太郎亦方谷学を継ぐ一人で、先考息軒の衣鉢を承けた逸材であったが、現代に至ってそのSchuleに安岡正篤がいる。安岡は金鶏学院酒井忠正伯の知遇を得て新官僚の指導者であったが、後來『師友』を刊して警世の良職の一である。ともあれ漢学の低調に在って陽明学の灯は掲げてられているのであって、志士三島由紀夫等のAnhängenに乏しくない。